
月 刊

MéLange

Vol.99



2015.02.22

詩と評論

月刊「MéLange」 Vol.99 2015.02.22

月刊「MéLange」編集部

詩 & 俳句 & 短歌

I am the escaped one 〈逃れえた者〉……………Pessoa 〈安西佐有理訳〉 03
 そこに扉が 〈短歌〉……………島 一木 04
 後輩に押しつけ損ねたゾッキ本目次多少の誤植を含む 〈短歌〉……………野口 裕 06
 佐保姫 vs エヴァンゲリヲン二号機 〈短歌と俳句〉……………高橋雅城 07
 渡船便り……………千田草介 08
 深淵の枯れ枝……………有時秀記 09
 かあさま……………月村 香 10
 冬空……………御着かおり 10
 ひつじのいる場所……………木澤 豊 11
 マル人／そろりそろり……………中嶋康雄 14
 木橋……………大西久代 15
 負圧……………上野 都 16
 アンヘルは不在……………大橋愛由等 18
 視線の伝説……………福田 知子 19
 黎明……………寺岡良信 20
 月の河……………岩脇リーベル豊美 21
 二つの名の動物性……………高谷和幸 22
 過ち……………富 哲世 23

エッセイ & 詩評

〈詩人通りより〉18「翻訳について思うこと」……………岩脇リーベル豊美 12
 ひと言詩評 〈2〉……………富 哲世 17
 神戸詞あしび 88「20回目を迎えた震災1・17の日」……………大橋愛由等 24

◆ I am the escaped one

Fernando Pessoa

I am the escaped one,
 After I was born
 They locked me up inside me
 But I left.
 My soul seeks me,
 Through hills and valley,
 I hope my soul
 Never finds me.

◇ 逃れえた者

フェルナンド・ペソア
 安西佐有理訳

わたしは逃れえた者で、
 生まれてみたら
 わたしのなかに閉じ込められても
 脱け出した。
 わたしの魂はわたしを探し、
 丘を越え谷を越えるが、
 魂に見つかるなんて
 お断り。

(編集部注。ペソアはポルトガルの詩人だが、英語詩も書いている。
 この詩もまた原作は英詩)

編集部日より★20/99回目となる「Mélange」月例会は、読書会と合評会を分離して行った。読書会は、11日(水)に、東京から詩人・杉本真維子さんを招き、詩集『裾花』について語り合った。司会は富哲世、進行は寺岡良信の両名。そのうち、本人から今回の詩集についての語りがあった。杉本さんにとって今回の詩集のテーマは、“はがし”だという。わたしは〈廻行〉と読んだ。自らのありようや出自に向けて杉本さんは、原初へのたちかえりを言葉で表現したのではないかと思っている。読書会が終わったあと、参加者とともに、同詩集の高見順賞受賞を祝う神戸祝賀会を催した。写真は、その時の集合写真である。楽しいひとときを過ごすことができた。(大橋愛由等記)



◆そこに扉が

島 一木

一、亡母、原紀子の短歌作品

二〇一一年一月から二〇一二年五月、産経新聞歌壇掲載順（誤記は訂正）

ラジオよりグノーの MARIA 曲流れ食卓にバラ一輪の咲く

車椅子に上げ膳据え膳居ごちよく介護の息子に百歳までと言う

半身麻痺のわが入浴を終えたるに一丁ありと息子は言えり

花みずきのひらくを見よと車椅子押して次男は窓に連れゆく

棧橋に足が届かぬ夢の中踏み石置きて亡夫は去りゆく

物干し場に巢のできあがり挨拶か蜂の飛びきてわが肩にのる

ヴィヴァルディの「夏」の第三楽章でわれを呼ぶ病母の叫び声入る

缶詰を食べるところで私の夢が終はると病母は恐がる

介護からふと手をやすめ窓外のアオスジアゲハの飛翔みつめる

眠れない病母の唇から墓場まで持つて行けずにこぼれる秘密

忘却の彼方より過去をたぐり寄せる病母と私と記憶が違ふ

点と点、線と線とをつなぎゆき記憶を病母とたどるたそがれ

知らなかつた亡父の一面語るとき病母に見知らぬ女性の気配

思ひ出か夢かの区別つけがたく病母の話をただ領いて聞く

すぐそこに扉が見えてみると病母が指すあの世とこの世の境がゆらぐ

昼と夜逆転しゆく病母すでにこの世の外の世界に生きる

居眠りのヤモリの子いて窓越しに撫でも逃げず手足ももいろ

夕食後シュトルムを読む長男の声音変えしに耳かたむける

点滴を終えたる腕に蚊のとまり一滴めぐむ痒さこらえて

町会の敬老祝いを貰いたり持参の人も高齢者なり

流れゆく雲の真中に目がありてじつと見ているわれも見返す

心病む若き友より電話あり同じ話をまたくり返す

小学校の夢に遅刻せり教室のふりかえる顔みな知らぬ顔

二、病母を慰めるために

二〇一二年五月、母入院。検査により肝細胞癌と診断される。すでに手遅れの状態。年末までに患部へカテーテルにて抗癌剤を埋め込む手術を三回受けるも、高齢のため病院ではこれ以上は無理とのこと。母は、「死ぬために病院へ戻りたくはない。自宅で死にたい」と言い出す。同

ロザリオを祈り続ける明け方に病母はやうやう眠りに入る

心地よささうな寝息の病母の顔ながめてわれも一息つけり

壊れてゐる小さい時計を拾つてと病母は頼めり真夜中の二時

肝機能障害による脳症があらわれはじめ。記憶から隣の部屋が消えてゐるどうなつてるのか病母は知りたい

「何と言ふ名前だつた」とわたくしの顔を見て問ふ病母の顔凝視る

秋晴の空高く病母の食欲も透きとほつた空気に包まれてゐる

MARIAさまから頼まれた十字架を手から離さず眠れぬ病母は

百合のそばを歩く人々夢見つつ「歩けないよ」と病母は嘆きぬ

まじろめる病母の寝息に合はすのか擦れ音に鳴く昼のこほろぎ

年十二月末に退院、自宅療養へ方針を切換える。

薄氷をわたりゆくかに小康の病母の日々あり祈りとともに

目の前に時間が置いてあると言ふ死を意識した病母の感覚

親燕から餌を貰う雛のやう食事のときに唇あける病母

朝食にリンゴパイばかり食べたがる病母さんの味覚はどうかしてるよ

キリストに近づくために無理にでも起きあがりたいた病母の一念

二〇一三年五月、連休中に私は秋田の聖母へ一人で巡礼に行き、病母の救霊をMARIAさまに願ひする。その後から、病母は時々MARIAさまを見るようになる。

天井に聖母MARIAが見えると言ふ臥すこと多くなりゆく病母は

紫陽花のまだほの白く日を浴びて窓辺へ病母も来たさうにする

「けつたいな服装したらあかんよ」と病母は私を心配して言ふ

二〇一三年十月三十一日、母永眠

あつけなくすうつと息を引きとつた病母を本当かと何度も凝視める

永眠の母に金木犀の花少しかざして部屋を香らす

簡素また慌しくも肅々と告別式の後の日々過ぐ

寂寥感十年経ても残るぞと喪中葉書に返信が来る

時折はあの世の母が来てゐると感じる屋根で雀らさわぐ

古くからの伝えをうっかり忘れたことに気づく

臍の緒を母の棺に入れ忘れわが抽斗の奥になほあり

◆渡船便り

千田草介

南譚部州の東の方の島より出たる精霊舟が貿易風を帆にいつぱいはらんで積み荷の骨を洗う波をかきわけかきわけアヴァロキテーシュバラ菩薩のいますポータラカ浄土に到彼岸せんとしたとき岸辺に迎えたのはフンボルトペンギンの群れをひきつれた南極老人だったという記録が刻まれた香木が室町時代応永年間に淡路島に漂着したという言い伝えがあるとオカメインコのキューちゃんやんが習いおぼえたチベットの語のお経の合間にささやくのでそれは国会の質疑で与太をとばす総理大臣ほど馬鹿らしくはないことだと思つて七福神めぐりかたがたの調査行を思い立つたのがちようど春節で今年のイカナゴは不漁であるらしいという不吉な情報が解禁前から近辺に流れている折でもあつたから大黒布袋福祿寿老人毘沙門天弁財天みんな渡来して神の座におさまり賽銭大もうけ恵比寿さんとして唯一国産といつても海の彼方から流れ着いた土左衛門のたぐいで出自はすこぶる怪しいゆえみんな在特会のヘイトスピーチで的にされる資格ありとすれば国粹テロに気をつけながら日本で最初に生まれた島をめぐるねばならないなと思つたときふと宝船はこの島から出た避難船だったかと気づいた。

◆深淵の枯れ枝

有時秀記

岩肌の露わな山々に張り付いた枯れ木の群に雪が降りつもり、枯れ木は灰白色の千の手を観音のように、あちこちに繰り広げる。暁に雪が降りやんだとき、空は雲の灰色と濃紺の青が混在して、地上の町をおおっている。町は周りが山々に囲まれた盆地の中に静まりながらも、眠りからいまでも目覚めようと希望に身を託すかのような気配を暁に、にじませている。

東の空に一筋の陽光が洩れるとき、なぜと問う者がいる。なぜその光景に目を止めるのか。眠る人が盆地の家に孤独を糧に呼吸している。暁のその光景が胸中に沈み続ける眠り人。問う者は眠っている。外界の枯木の群の光景を夢の中に呼び込みながら眠っている。深く、また浅く波打つ眠りの、山と谷を漂いながら、時に山々の千の枯れ木が眠りの波間に浮かび、深い眠りの底に降りて行く。

深い眠りの河底は、降りても降りても底がないのか、無数の枯れ枝が、溶けない雪を絡ませながら、あたかも果てない奈落への旅路のように流れゆく。

内界の眠りの中に居ながら、暁がもたらす光景の意味合いを誰が語り得よう。外界の枯れ木も雲も語り得ない。ただこの深淵への意志を持続する眠りの主だけが語り得るという伝説が、眠りの深い河を流れゆく枯れ枝のひしめく音から生まれる。

底のない眠りの流れそのものから声が聞こえるのは、夢の乗り換え駅である。深淵に集まる枯れ枝の群舞が雪降る渡し場にひしめき寄せる乗り換え駅。

午前五時、暁は断ち切られ、乗り換え駅に、突然、陽光がさんさんと降り注ぐ。枯れ枝の群舞にからんでいる雪はたちまちの内に溶解する。眠り人のまなこは、閉じたまま蠕動し、枯れ枝の群舞と呼応しているかようだ。陽光が、さらに熱を帯び、枯れ枝もまた、たちまち炎を呼び、燃えおち、須臾の間に灰化する。

蠕動していた眠り人のまなこそのものも、溶け果て、深淵の熱河に消えると、眠りは、ただ、眠りそのものとして流れてゆく。音から生まれた伝説もまた、この眠りそのものの流れによつて、灰化する。

聴こえるか？ 目で聴き、耳で見るなら聴こえるだろう。無底の声が。山々の枯れ木も雲も、盆地にかこまれた町も、無底の真空の中で灰化する残骸の声だ。内界にもたらされた巨万の富だ。語り得ない富という伝説だ、と眠り人は自らの夢を灰化しながら、美しく発狂する。暁が断ち切られる陽光の下に。

◆冬空

御着かおり

ライチでできたジェラートの色が空を覆う
その雲は煙のようにのっそりとしている

しずかな

白木蓮の木では

見逃しそうになる程にまだ小さく

けれど産毛を生やし尖った芽をつけて

花の支度を休まない

煉瓦敷きの歩道からマーキングの匂いが

冷えた空気を連れて鼻に入ってきて

忘れられたことも用の乗り物は横転し

落とされた片方だけの手袋は踏まれている

佇むボールがひとつ

それから

花壇には山茶花の花が咲く

はるかかなたに

ハレーションを起こしたような叢の

白く放たれたなだらかな台地があり

その空を鳥が飛んでいるのだろう

◆かあさま

月村香

おなかにカイロをおはりになっておかあ
さまと呼ばば軽く咳をしてふりむく本
当は足先も冷たくてたまらないのよと
ドライアイに傷の入ったひとみでああ
なんと若くていらつしやる一日に三々
四時間ほどの労働と同じく三々四時間
ほどの学問にきれいに髪を結われて
から転倒した勇者ではないがキリッと
もキツともどこかにいる挑戦者を見い
るあなたは男なのか女なのかもわか
らない神の子わたくしの母笑うの活用が
うまくできないわたしのことを言えば
わたくしはかあさまと違って一日とし
て人生の目標が定まつたりはしないだ
から悲しいもうすぐあなたの人生の一
夜が始まる

◆ひつじのいる場所

木澤 豊

草というたましいのあつまるところ
揺らぐところ 休むところ
そこから来るひとをへつれというのでしょ
うか

ひつじがいつびき

木造ビルの階段の踊り場から
夕日に染まった荒れ野が見え
きつい風が枯れ草を揺すって
石の影が落ちている

それに似たひとときが かれにもあつたと

おもい

おもいを強くするほど かれに気持ちがあ

つまる

これが都会の空の景色です

という書簡が開かれたまま

大事な荷を渡して ほつとしていると
五十数年 あつとおもう あつ
ガードを電車がごうごうと走り去って
その下で小さな火事があつた
白い皿の上で肉が裂かれ煙が上がり
かちつとフォークが突き刺さり

記憶は

おもいだすんじゃない感じるもの
ひつじの毛皮の上で眠りかけると
ああ あの群れは波立ちだったと
波止場の突堤に立つ気分になって
どこでもない 場所を思い出した
そうかケムリというネコが 道端を
シネマ通りを びやおんとすつ飛んだ
いや 恐怖に駆られるひつじ
怒りに追われるひつじが

うん 大きい小さいと言っても

ネコという大きさ 羊っていう小ささと

いうか

空き地にはオオマツヨイグサが黄いろくと
もった

やっぱり なにかが あつまって

空に風の鞭が鳴っている

わたしの 大陸の 荒野の 手幅くらい
外がわに
ひつじたちが もうもうと砂ほこりを巻き
上げて
大きな岩の狭間を 押し合つて
境界を突き破る

あれはやっぱり ひつじの荒波
きょうは時化てんだ
きつと

無頼な浜だ

栈橋のむこうに 遊園地が

ぼうと浮かんでいて

幾枚にも剥がれたわたしのようものが

空に浮いている



実は私は翻訳という営為が好きではないらしい。好きではないというよりも苦手だというべきかもしれないが、しなくて済むものならばしない方が嬉しい。どうしても頼まれたりすればするだろうし、英語やフランス語やラテン語も習ったことはあるが全く自信はなく、日独語間になつて横柄に聞こえてしまうということとを怖れながら言う、できないわけではないのでできてしまう。ただその際、常に壮絶な内面における葛藤というものが意識下で認められ、その葛藤を一旦予見してしまつたときには心的に萎え、遂には、私でなければできないというものでもないであろうからという結論に達して、ほとんどは断つてゐる。発話者の意図するところがそれなりに伝わればいいという場合もあるし、厳密な訳語が逐一必要な場合もある。昨今、テレビ中継などでは翻訳、特に同時通訳といったものが蔓延しているし、またインタ-

翻訳者にとっては自由の場であり、また別の翻訳者にとっては葛藤の沼地であつたりするのだろう。

これに反してになるが、柳父章は著書『ゴットは神か上皇か』で、日本では「原文に忠実であるが、日本語の文体としてはよくない、という理由で翻訳が強く批判される例は極めて稀である」と指摘する。そこでは、言語の異種性ではなく、「正確」に翻訳することが主眼視されているが、その後には、ベンヤミンが言うような支配関係、つまり宗教伝道や植民地支配を免れ多言語を強制されるというのではなく、古代における唐文化であれ近代西洋文化であれ異文化接触の際に、ほぼ例外なく受け入れる側に身を置き、優れた（と思われる）ものを、後に改良するにせよ、従順に受け入れることに重きを置いてきた、ということが考えられるという。それは、他国と関係を持つならば、まず翻訳者は諸言語間の埋められない溝に愕然とし、強いられる言語とそれを受け入れなければならない自国の言語との落差に苦悩するのではないかというのである。

話はずれるかもしれないが、バイリンガルもしくはポリグロットと云つた、外国語に携わる人間なら誰もが羨ましがするような運命を背負つた人たちがいる。それは厳しい運命に変わる。親が二カ国出身であるならば、もしくは二カ国および複数にかけて居住していれば、自動的にそうなるということも信じられる根拠はないからである。実際、私の近くの所謂ハーフの子供たちのなかには、日独語という極端に異なる言語の溝を受け入れられない子が相当数いる。そしてその親たちも、毎週土曜日、大都市にしかない日本人学校の補習校に通わせたり、地域でも同年代の子供を持つ親同士で場所を借りてグループを作つたりと、親は自分の子供がなんとしてでも自分の母語を話してほしい一心で、支配関係構築とも思われる涙ぐましい努力をしているのである。子は子で、グループになると快適な方へと流れてしまう。そしてその快適とは現地語であり、それが母語となるのであろう。イスラム学者の井筒敏彦は28カ国語習得していたということまで有名であるが、その勉強方法が凄しい。ロシア人の知人にもそういう哲学研究者がい

ネットでも無料サイトの翻訳機能等が使用可能であり、明瞭に一对一として試みられた翻訳を経験する人は多いと思う。また、「めらんじゅ」に限らず翻訳に携わつてゐる詩人が、多様な国の詩を講読可能としていることも事実であろう。ただ、今更という感があるが、言語に関係さえしていれば翻訳を職業とするエキスパートでなくても翻訳や通訳が難なくできて当然と思われる傾向も依然として強い。ともすれば、難なくできることが当然と思つていないはずが、翻訳機を通して全く見当違いの訳文が眼に飛び込んでくると、なぜ正しい翻訳をしてくれないのかと理不尽に憤慨するという経験をもつてゐる現代人は多いと思う。

大学の日本学などにはしばしば企業や個人から翻訳や通訳の依頼が舞い込む。多かれ少なかれ他言語でも同じことがあると思う。先日には、近隣にあるバイオエネルギーの会社から40頁に及ぶ公的性格をもつたパンフレットの翻訳依頼があつた。冒頭に「かんた日本語」「電流とぬくもり」というもので、その先の辛苦を思い描き、引き受けてみようという方も登場したので、私はやはり辞退することにした。

何が私をしてそれほどまでに翻訳を忌避させるのか。ヴァルター・ベンヤミンは『翻訳者の使命 Die Aufgabe des Übersetzers』において、翻訳とは、報知のための優れた技術であるが、思想的には支配-服従関係に奉仕する暴力的な側面を持つてゐるという。神の言葉のように、聖書のバベルの塔に見られる政治的・イデオロギー的要素が翻訳には潜む。原作と翻訳が相互に生きる歴史的な生において、片方だけでは提示することができない双方間の「同一のもの」を創り出さねばならず、それは個別的な諸言語に達成可能なものでなく、諸言語が互いに補い合うもろもろの思考の総体によつてのみ到達しうるものである。（この文章も翻訳調になつてわかりにくい。）一对一の訳語が許容できない遊びの空間(Spielraum)がなければ翻訳は成立しない。ベンヤミンはその空間を「純粹言語 die reine Sprache」と名づけている。それは、

非常によく若くして、ロシア初のニーチェ全集を監修している。（ニーチェのロシア語翻訳がこれまで存在しなかつたということ自体の支配関係にも納得したが。）

自画自賛するわけではなく、私はこの時点で漸くこの親的努力が支配願望だつたとの自己認識をしたのだが、出産するまで主にドイツ語のみで生活を送つてきて、子がお腹に居る間からその子には日本語で話しかけるといふ二重生活に切り替えたときの、自分のストレスを忘れない。日本語で言わなければ我が子ながら振り向かず、チヨコレイトももらえないという無慈悲なことをしたが、ドイツ語でも素晴らしい迷言の多い子なので、言語一般の翻訳行為が支配関係というイデオロギー側面を持つということに直視しているようでもある。

閑話休題。ドイツには市民大学と訳している Volkshochschule なる成人教育の機関がどの町にもあるが（新カント学派の理念に基づいたものらしい）、私はこの詩人通りのある町の市民大学で25年にわたり日本語の授業をしてきて、その間に日本語に関心があつたり必要としてゐるドイツ人とともに、片親が日本人であつて日本語は読み書きは勿論話すこともできないという相当数の二世に、ひらがなも含めた日本語の基礎を教えたりしてきてゐる。彼女ら（なぜか主に女性）の動機は当然日本にいる親類、友人、仕事関係者とのコミュニケーションだが、物心がついてから出自というものを考え、その根源に、これまで拒否してきた言語への回帰、さらに言うならば憧憬があるのである。失われた母語への意志は支配-服従関係ではなく、翻訳への意志とは逆流しているような気がする。

同じ研究室で勉強した同僚が主催する詩工房と訳している Poetische Werkstatt なる会でドイツ語で詩作を始めてからもう5年ほどになる。ドイツ語で書くときは、日本語で考えてからドイツ語に訳しているわけではない。自作詩こそ支配-服従関係で翻訳できず、「同一なるもの」など見つけ難いと思うからである。（というわけで今回は詩の拙訳を休止させていただきます。）

◆ マル人

中嶋康雄

マル人は雲の間にいる
マル人の身体はフワフワ浮遊している
マル人どうして
くつついたり離れたりする
マル人は白い糸を吐き出している
糸を吐きながら小さくなる
小さくなる
くつつく
くつつくと
また糸を吐き
小さくなる
マル人のいる辺りの雲は
少し臭い
マル人のウンチの臭いだ
マル人は雷を
食べる
雷が鳴ると
マル人が集まる
口をパクパク開けると
雷が吸い込まれる
音だけが残る
雷をたつぷり吸ったマル人は
燃えながら巨大になる
太い糸をたくさん吐く
太い糸はクルクル丸まって
新しいマル人になる
燃えながら
糸を吐き終わった

古いマル人は
煤になり
フワフワと地上に落ちる

◆ そろりそろり

中嶋康雄

毛虫だった
そろりそろり
板敷きを横切った
カレンダーは十年前のままだった
日と雨にあたって萎れていた
数字が垂れ下がって
風に舞い
どぶに落ちた
よれよれの数字を拾う奴がいた
仕事を探していた
おどおどしていた
好きなことは逃げたし
嫌なことは肌にくびりついた
パチンコ玉が
折り込みチラシから転がり出た
パチンコ玉を
握っている
あめ玉に化した
あめ玉を口に放り込むと
パチンコ玉に還り
喉を滑った
尻の穴に引っ掛かっ

貧乏神を連れてきた
葉っぱにたどり着けない毛虫だった
そろりそろり
時間だけが過ぎていった
電が降った
雨に変わった
毛虫だった
とぼとぼ歩いた

濡れたネクタイが
腹を這った
冷たい毛虫だった
そろりそろり
腹を囓った
毛虫だった
腹には食害の穴が開いた
穴の周りは茶色く干からびた
心臓がドクドクと動いているのが
かすかに見えた
笑えた
心臓が毛虫にたかられていた
毛虫は空虚の卵を産み付けた
貧乏神も笑った
そろりそろり
カレンダーがめくれた
めくられる意味も
昔はあったが
めくられる物理だけが
残った
蛹を忘れた毛虫だった
食害だけが
一人歩きする毎日だった
食害だけが
空を見上げた

空はよそよそしかった
毛虫だった
そろりそろり
惚けて歩いた
クラクションも鳴らさずに
車が轢いていった
ぶちゅ
と潰れた

甘いにおいに騙されて
鴉が蠢く残骸を啄んだ
鴉の腹は涼しかった
鴉の腹を食べ始めた
不味かった
貧乏神の味がした
そろりそろり
インフルエンザが流行った
毛虫だった
街に
宇宙のマスクが咲いた
毛虫だった
マスクが萎れると
口と鼻がなくなつた
食害だった
仕方がないから
マジックで書いた
そろりそろり
空気が吸えた
空気もマジックで書かれていた
中途半端に水性らしく
雨が降ると
薄汚れた

◆ 木橋

大西久代

いない君の五月
うたを失った私に
薄闇のようにおし寄せる
木橋に佇むきみの眼差し
時に失語の出口で
引っかかる破れ帽子
祈りの姿は色あせる
降りそそぐ光を溜め
ひらくモッコウバラ
木橋を黄金色に染めあげる
駆けめぐる未明の夢
遠く旅立つきみのあした
鳴り響く水音となり
萌すものを鼓舞する
カメラを構える 手
ひび割れた沈黙の距離を測っている
曳いてだき寄せられるなら

くもる食卓の窓辺は
きみの発語に明るむだろう
睡蓮の広がり
ふたつの顔を浮かべる
底をうねる魚が一瞬光る
行かせたくない私のくびきが
いつそうきみの出立を促す
去るものの背に陽ざしはうつろう
ただ見やるものに
燃える五月が色濃く残される
今も
眠れぬ鳥をかかえ
記憶の木橋へ撞着のうたを
拾いにいく

◆ 負圧

上野都

書くか
書かないか

書けという
書くなという

どちらも

生まれる前の臍の緒

生れてからの五〇センチ

生贄の羊

褐色の絶対真空

よろりと吐き出すちちの記憶

剥がれ落ちた内膜の
その仮の重さほどに
ちちの手は無防備

受け取って笑う
抱き取って笑う

笑うことで始まった負圧の慰み
泣きそびれたまま

ちちは
ぶよぶよと容かたちをなさない子の
生涯のおやになった

ちちと
わたしの五〇センチ
硬く縮んで銀河にもなれない

書けという
書くなという
ちちの

ことばの一步先にある自分に届こうとして、コワサに届いてしまう、コワサに届く詩というものがある。

川原

杉本真維子

通路、が塞がれ、身長ほどにしか、心が無い、日のなかで恐怖の種がわれる。蛍光灯で焼けしないか、ソファで溺れないか、窓で迷わないか、わたしはだれなのか

*
存在しない、ハンモックの午睡でもいい。生まれた時刻までもどつて擦れる頭皮の、その熱の、さいしょの突進を握って

(光について
尋ねられた)

それは、一本の壘の中
光る傷口が、川上から、流れてきた
むかし、それを、竿で突いた
川原にさらして眺めると
石のほうがもつと眩しく
「くやしきのなかでしか生きることができない。」

一枚のひと、ひとりの肉、と、
硬貨のように数えている
ひたいの奥の整列が
炭火を燦らせ
闇のうらがわを舐めていく
穴あきの薄紙をかぶる、いやらしい文字、
から生まれてきた

(犀川の木屑にまだ磔の痕がある) (詩集『榎花』より全行引用)

たとえば蛍光灯、たとえばソファ、例えば窓と、日々のオ
ブセッションの種が弾けていくなか、逃げ場のない皮膚と
いう日常におおわれた一個の「わたし」という存在に、顔の
のぞかせてしまう(無)もしくは(無根拠)というものに、『わ
たしはだれなのか』といきなりたどりついてしまう。そして
この現在に逃げ場を持たない無根拠への指向はやさしさを
求めるかのように、ただちに生い立ち——光の起源に縫われ
たもの——を喚び寄せる。けれど思い出はまた、心的外傷の
鮮やかな記譜でもある。不明の水源からその有用性を剥ぎ取
られて流れ寄って来たかのような(壘)への童心的な執着と
失望の記憶、それはたとえ石という剥き出された自足性の
反射の露出的輝きに対し、『くやしきの中でしか生きること
ができない』多層化された宿命という失楽園の、最初の明瞭
な刻印のひとつかもしれない。光りもまた閉じ込められてい
るのだ。「わたし」もまた人であるということの、慚愧に充ち
た思い。ここでは過去と分節的現在を直結する、謂わば外科
的な切断と縫合の手術が試みられていると思う。そして脳
裡にくすぶる止まない火のような、(わたし)というこの光に
縫われた非自足性は、届くということがそもそもその乖離を前
提としている意識と文字とのもどかしい往還の裡に表象さ
れるなにもかなのだ。この往還運動のなか、図と地のデカ
ルコマニーのように、食み合う人間性の痕跡は、ここにもそ
こにも『犀川の木屑』のなかにも隠されている。

とらえどころなく進行している自他の境域にわけ入り、関
係性を内視鏡的に構築する、臨場感に溢れた詩集『榎花』の
巻頭に置かれたこの詩は、詩集全体を貫くその不屈の追求精
神の基本姿勢を示すものでもあると思う。

富 哲 世

ひ と 言 詩 評 2

◆アンヘルは不在

大橋愛由等

角から二番目の鳶が枯れたままの家には、いまは使われなくなった井戸があり、ひとびとの沈黙がしどけなくいくえにも折り重なって沈殿している。意味を付与してはいけない。七角形の庭石に座り、かわたれ刻になるとノトスを集めては前世は鴉だったと懐古していた老夫は立ち去ってしまったのだろうか。喩は信じないほうがいい。「もうひとりのわたしは」とチノパンツのポケットの中の極微をいじりながら、公園の東端のベンチに明日の夕刻うつむくその人のために、一片のそよぎ風を用意しておこうと思っっている。全きものは在るのだろうか。「なにが怖いのか？」と唐突に聞いた。だす少女がその公園に現れないともかぎらないから、ぼくが少年時代に書き記したカイエをひっぱりだしてきて、断念と絶望のパロールを準備しておこう。不全はお手のものだ。角から三番目の家の前を通つたとき玄関先にて「アンヘルは不在です」と来訪者に伝えたのはアンヘルだったということは、公園の椎木だけには伝えておいた方がいいのだろうか。川石だつて裏切ることもある。襟元から侵犯してくる抒情を受け入れてみた。それは青磁色となつてわたしにまとわりつき、今日は「わたし」があらたに四つも生まれるような予感がしてきた。回帰はすべて寝不足だ。

◆視線の伝説

福田知子

水の気配に呼びとめられ歩く朝
水音がどこかしら懐かしいひとの聲になり
響いてくる風音は 秋枯れた草叢の少し向こう
網の目になつた虫たちの甍ねぐらからの伝言

朝焼けにたゆたう抒情は日々濃くなる樹々の影に紛れ
自転車を降り 走り来る子らの影と濃く重なりあう
それら影たちがしなやかな護謨ゴムとなつて伸び やがて溶けゆくまで
水の歌声は水鳥の影と重なりその輪を広げながら羽ばたいている

川の視線は遠く 近く 虹彩を微細に調節しながら
木々に 人びとに 草叢に 水鳥に 虫たちに投げかけられている
気がつけば洪水となつてこの地域一帯を震え上がらせるほどの――

近づき 流水にそつと手を浸せば掌てのひらは水の影でみだされる
その川の その水の その視線の 何年も昔から伝わる伝説
この星のあまりの愛の深さによつて生みだされた慄おのき それら視線

◆黎明

寺岡良信

潮鳴りに拒まれた眠りは
いつも波が綻びを洗った
黎明の
蒼い炎に灼かれた櫛から
もうひとりの私が旅立つ
遙かに嘯く
海の吐息と
果樹わたる風を放棄した
記憶の軋みに
馭者座の鞭がひびく
霧に拭はれた尾根づたひに
谿へくだる径
未環の物語を閉ぢるために
季節の崖を逐はれる石工よ

春寒き

その岩場から私は切り出されたのだと

◆月の河

岩脇リーベル豊美

わたしは跪いている
この世で暫し貝になり
ふたたび
海底に沈む悲しみが
悲しみだとは映らないまま
私は跪いている

幽谷から
湧き出づる水光が集い
滔滔と
険に落ちる流れとなる
酒池では
ふと海風の気配をおぼえる
暮れる海のような心をして

時間が尽きると
橙の齋服に身を包み
神饌は清められた
流転の果てにたどり着く晚餐
銀盆の円上で敬虔になる
斬首される餓鬼のために
ひと匙の御塩をとりわけたい

◆二つの名の動物性

高谷和幸

沓（交換可能なわたしの試み）
テレ わたしに
——わたし—— ひかれるむれ
いのちの——草の そのつらなる草の
——ふたふたと——隣が近い——漆喰（砂の荒地）
近づこうとしている
わたしはわたしを見るモノを見ないのだから
（——が） もれるものを聞く 同じように（——もらす） だろうか
——名になるための目（——親指の骨） 下さい
あれは——燃え
る樹——声の波紋が（熱い）
人の柱——はかまの上で
くろずきん（メデイウムの兵士たち）
——かぎせ——病院の窓の下を通る高速道路の橋脚が——
首のように国家が
焼尽した——ミニマルの顔貌
不死性に（むぎだしに）

式（動物の皺面）
幽霊はうしろから出るとは限らない。同じようにいつ出るかは分からない。あなたが死んでから記憶が声に変わるまでに数十年はかかるだろう。残された本を読み、文字の奥にあるあなたの「動物の皺面」をかぶることが臆することなくできるようになって、すべての草や木が鐘を鳴らすようになるまでに四拾年はかかるだろう。もちろんあなたの貶価も、許しがたい誤読も届かないこちらでは時間がわからないくらい流れている。怖いのは忘れることではない。幽霊がいつかは必ず私のもとに現れることだ。あなたが言ったテレ（遠隔操作）は、あなた同様にさせたいことを私の手や足に写し変える。穴の底でばたんと蓋が閉じて、漆黒の闇の中で息絶える恐怖。顔の裏側の「動物の皺面」をかきむしる。その時の心覚えのために二つの名を与えてほしい。あれは栄光か供犠か。

◆過ち

富 哲世

首を落とされて死ぬ
牛だってそうだ
満天の星の下
ほんとうは血のにじむ
にんげんのことばで叫びたい
終わりのない
穴の先で
出会うものだけを
信じて
赤い壁となつて
どこまでも
いく
あれは草
星のしづくを受けて

風にふるえているのは
あれは蟻
葉先の行き止まりで
右往左往して
いるのは
さわれない
息吹を
くらく波立たせて
だれにも
話せない
あれはかすかな乳の
こだま
わたしには
分からない
それが
過つて
いたのかを

尹東柱をいたむ 京の冬の空の下

尹東柱と、ガルシア・フェデリコ・ロルカ。いずれも非業の死をとげた詩人である。母国語で詩をかけたという各で京都・同志社大学に留学中だった尹東柱は、日本の官憲によって逮捕され、あと半年生きながらえていれば敗戦となる二月一六日(月)、福岡の刑務所で獄死する。

寒きわむ詩精にささく悲哭うた 愛由等

ちょうどその命日にあたる一六日に、同志社大学今出川キャンパス内にある尹東柱詩碑前において、(第3回在日韓国人・日本詩人共同尹東柱詩人追悼会)が行われた(在日の詩人・金里博氏と大橋愛由等の共同主催)。ロルカがファシストたちによつて殺された八月一九日近くに行っている追悼朗読会が夏の詩祭なら、この日の追悼会は、冬の詩祭といったところだろうか。



尹東柱詩碑の前で記念写真

今回は、韓国から二人のゲストが参加。詩人の李潤玉・元韓国外国大学日本語学科教授・韓

日共存文化研究所所長は、自作詩を朗読。金永祚・日刊文化新聞(電子版)編集長・元(社団法人)ウエソル会理事も詩碑のまえであいさつをした。

春ままだき異語拒みし詩人あり

追悼会は、金里博氏のハンゲルと日本語による挨拶があり、韓南洙・韓国ハンゲル学会正会員・ハンゲル学会日本関西支会常任顧問によつて、尹東柱の詩作品が朗読された。つづいて上野都さんが尹東柱作「あしたはない」「生と死」「蠟燭」を翻訳して披露。福田知子さんは書き下ろしの自作詩「青の詩人」を読んだ。俳人の望月至高さんは「望郷の詩を夜空へ氷湖照る」(反日反韓串刺しにして焚火)「冬麗の海峡をくるK-POP」の三句とともに最近の日韓関係についてしゃべった。

会の彩りを添えたのは、二人の演奏家たち。まず能管奏者の野口久美子さんは、「序之舞」(能の舞の曲)、「水辺の声」(野中作曲)を演奏。玲瓏たる大学キャンパス内に響きわたる横笛の音は、通りすがりの人たちの注目を集めることになった。つづいてシンガー・ソング・ライターの李榮宝さんが、尹東柱の詩に曲をつけて歌いこれもまた足をとめて聞き入るひとが多かった。

風に問えカイエの在り処凍てし日も

記念写真に収まっているのは、韓国からの留学生三人も含む。マンガ、法律、料理を日本で学ぶために渡日している三人がたまたま詩碑の前を歩いているところを、当日配布した冊子を望月さんが配りがたら会話が始まり、わたしが三人を呼んでみんなの前で挨拶をしてもらったのである。それによると、三人とも尹東柱のことは韓国のセンター試験で出題されるので知っているという。——こうした出会いがあるのも、詩碑という記憶を喚起する装置があるからであらう。

詩と評論
月刊「Mélange」Vol.99
神戸

2015年02月22日 通巻99号
発行所/月刊「Mélange」編集部
〒650-0012 神戸市中央区北長狭通 1-7-1 2F
編集・発行人/大橋愛由等(「Mélange」同人)
maroad66454@gmail.com
定価 500 円(税込)